

いつしよに「日本語」もなびませんか！



2月15日の「日本語ひろば」に参加した、外国籍市民の皆さんとボランティアの皆さん。ペルー5人・中国3人・タイ3人・インドネシア2人・ベトナム2人・ナイジェリア1人の外国籍市民の皆さん、合計16人が参加しました



会場の様子。みんなとっても熱心で、5年間通っている方もいます



大東南公民館の「日本語ひろば」は、市内に住む外国籍市民の皆さんが、生活に必要な日本語を学べる場です。平成十六年三月にできてから、ほぼ毎週、日曜日の午後二時から五時まで開催しています。外国籍市民の皆さんが地域と交流していくためには、日本の習慣や決まり事などを知ることが大切です。その第一歩として、ことばの壁を克服するお手伝いしているボランティアの皆さんを紹介します。

大東地区の工場などに勤める外国籍市民の皆さんが、近くで日本語を学べる場を作れないか。そう考えた「日本語ひろば」代表の八木長忠さん（71歳・南台三丁目）が、大東南公民館の館長に相談したのが平成十六年二月でした。すでに同じような場を提

供していた南公民館のボランティアの協力もあり、一か月後



小学生の算数などにも対応

うな場を提

に「日本語ひろば」ができました。「日本語ひろば」のボランティアには決まりがあります。「自分の立場でなく、相手の立場で考える。そして、相手を受け入れる」。これを踏まえて、日本語を学ぶ手伝いをするようにしています。ボランティアの人数は、いつも十人ぐらいです。ひとりひとりのレベルに合わせるために、基本的に一対一で対応しています。

手。「いつも使っているけれど、日本語は難しいです。学ぶ立場で考えると、気づくこともたくさんあるんですよ」と、ボランティアの皆さんは言います。相手の立場で考えるからこそ、日本語を勉強し直す必要を感じるといふボランティアの皆さん。それぞれが勉強するだけでなく、三か月で一程度、ボランティアとして勉強会を開催しています。経験を共有し、問題解決や互いのレベルアップにつなげるためです。また、大東南公民館でも、年一回、日本語ボランティア養成研修会を開催しています。ボランティアの皆さんの努力は、受講した皆さんのことばに表れています。「二人で買い物に行けるようになった」「日常会話ができるようになった」「日本語検定の一級に合格した」……。一人でも多くの外国籍市民が、川越で楽しく暮らしてほしい。その気持ちを胸に、ボランティア活動は続いていきます。

まちのできごと
川越市の面積は109.16km²

109パレット

川越の2校、全国の舞台へ！

（財）日本テニス協会などが主催する硬式テニスの大会「第31回全国選抜高校テニス大会」に、男子で川越東高校が、女子で山村学園高校が出場を決めました。団体での全国大会出場は、両校とも初めてです。

山村学園高校は、念願の全国大会出場に喜びを隠せません。同時に、全国の強豪と戦えることを楽しみに「力を合わせて挑戦します」と、山村学園高校の選手の皆さんしています。「学年に関係なく部員全員が仲のよい、和気あいあいとしたチームです。それぞれの個性を生かして、まずはチームで1勝したいですね」とキャプテンの神保葉さん（2年）。



「気持ちでは負けない」と、川越東高校の選手の皆さん

川越東高校はここ数年、激戦区の県予選突破まであと一歩という状態でした。今回は、少ない時間で密度の濃い練習を続けた結果、どこからでもポイントを狙えるチームになっています。主将の井下匠さん（2年）は「部員全員の力と気持ちで、出場権を勝ち取れました。ベスト8を目標に頑張ります」と意気込みを語っていました。

同大会は、福岡県で3月21日(土)から開催されます。埼玉県の、そして川越の代表として、両校とも頑張れ！

市内で初めて、渋沢栄一賞を受賞

社会貢献活動で実績を残した全国の経営者を埼玉県が表彰する「第7回渋沢栄一賞」を、川野幸夫さん（66歳・仙波町3丁目）が受賞しました。長男を幼くしてウイルス性脳炎で亡くしたことをきっかけに、平成元年、小児医学奨学財団を設立。小児医学の研究者や学生に、研究費や奨学金を助成するなど、小児医療の支援に努めてきました。川野さんは「今までやってきたことが評価されてうれしく思います。さらなる小児医療の充実に向けて、これからも貢献していきたいですね」。



「おかげさまで」という気持ちで大切にしてきました、と川野さん



まどいと拍子木は、鈴木さんの誇りです

話していました。

たいですかね」と笑顔で運行にかかわっていき

できるかぎり、山車の

きました。これからは

つながりをお願いして

とびとして、地域との

しています。「まちの

組み立てや巡行を指揮

町内頭として、山車の

五年からは、喜多町の

たそうです。昭和四十

行をつかさどる、町内頭の拍子木にあげられてい

その写しは市内のみならず、県内全域に広まり、伝統芸能の継承に役立っています。

若いころの鈴木さんは、川越まつりで山車の運行をつかさどる、町内頭の拍子木にあげられていたそうです。昭和四十年からは、喜多町の町内頭として、山車の組み立てや巡行を指揮して、地域とのつながりを大切にしてきました。これからはできるだけ、山車の運行にかかわっていき

たそうです。昭和四十年からは、喜多町の町内頭として、山車の組み立てや巡行を指揮して、地域とのつながりを大切にしてきました。これからはできるだけ、山車の運行にかかわっていき

鈴木一郎さん（79歳・松郷）



53